

宿命的眼病障害と

苦難の抑留生活の克服

和歌山県 笹内 武夫

私は、大正十三年二月十一日午前四時三十分ころに、本籍地である奈良県吉野郡の十津川村大字神下三七三番地で、父笹内為市と母久栄の三男三女の末っ子として出生したらしい。その日から私の宿命とも言える、父の道楽を原因とする、「風眼」という目の病を起したということを後で知った。生後三日目の朝、両眼は腫れ上がって「目やに」がひどい。それを見た母は、産後直ぐであり、どうして良いやら、なす術も考えつかず、本当に困ったそうです。この事も実は、ずっと私が成長してから後に、母から聞かされたのであった。不便この上もない山間部、五、六軒しかない部落内の出来事である。部落から部落への相互連絡は、どこへ行くにも五キロ以上も歩かねばならない。乗物を利

用するとすれば部落から八キロも歩くことになります。今申している事は、当時、母の思い悩んでいたことを、私が少し成長して聞き分けることができるようになったからの話でありまして、ある時は母が部落の人々の中から、一度お大師さま（拝み屋）（加持祈祷師）に頼んでみてはと言われ、そのとおりにしようと思い、知人を頼んで祈祷師の所へ行ったこともあるそうです。「この子の右腕に大きな痣がある、ここの血を採り、綿に浸し皿に入れて夜明けの明星にお供えして、この子の目が一日も早く治りますようにとお願ひしなさい、きくと快くなりますよ」と言われ、毎朝四時起きして四十日間続けたそうです。

しかし、結局は余り変わりもしないものですから、思い切って母は親戚に理由を話して金を借りて医者に診察してもらうようにしたそうです。早朝に出ても新宮には夕方になる不便さ、仕方なく新宮本町の青木先生に診てもらい、これは大変な病気だということとで、先に申したとおりの「風眼」であった。その時の先生の話では「でも、もう大丈夫だ、学校に入る前に手術

をすれば必ず奇麗に治るよ、心配ないよ」とまで言われていたのですが、わが家の貧困、父親の道楽のため、私の目はそのまま放置され、六年が過ぎました。これからの私の生活が大変でした。物心つくようになり、学校にも通うことになったからです。

私が初めて校門を潜ったのは、和歌山県東牟婁郡九重村尋常高等小学校でした。しかし、学校を行き帰るとは名ばかりで、先生が事あるごとに黒板に何を書いてくれても私には全く見えないのです。このころの私たちの村の学校ではノートを使用することもなかった。従って、私は小学校高等科二年を卒業したのですが、思うように勉強もできないまま、学校を修了したことはしましたが、社会に出て就職しようとしたしましたが、どこの職場を訪ねても目の障害が災いして落ち着く所がありません。

昭和十五年四月、奈良県吉野郡十津川村神下の瀧郵便局の配達員として入局したが、視力障害を理由で約八カ月で解雇され、十六年一月から山仕事（伐採、搬出）、その後の入隊まで、この仕事であった。日々、

目のために何一つ満足にできない口惜しさ、迫り来る徴兵検査、二人の兄も兵隊の経験はない。私だけは、何としても軍隊に入りたい。軍隊生活ならという、私の夢でありました。

昭和十九年に入りいよいよ徴兵検査近しです。しかし私自身の体格に問題がなかったとしても、視力のため検査が通らず不合格になって落とされるようなことになったらつらい。何としても絶対に合格したかったのです。どうすれば良いかと思い悩んだ。考えついたとどのつまりは、検査の当日まで視力検査表の暗記に精根を集中して視力〇・六の線にまで覚え込むことより方法はないと心に決めて練習に打ち込みました。

（当時の私の視力は〇・三）だれよりも早く会場に行き、練習の「暗記の成果」発揮あるのみとし、検査に臨みました。そして当日の全検査が終わり、ついに発表の時が来ました。

「笹内武夫、第一乙種合格」と呼ばれた瞬間、私の念願を達成することができた感激と嬉しさに、思わず両手を強く強く握り締めていました。

昭和十九年十月に入り、入隊通知書が届きました。

これまで私を受け入れようとせず、私の生まれながらの不幸を見て見ぬ振りをしてきた私の近くの「環境世間」の目から逃れて戦線に行けると思い、一日も早く我が家を離れたかった。入隊通知書では、一応の入隊先は大府堺市金岡の輜重連隊で、約一週間の駐留後は、満州に渡ることとなりました。

昭和十九年十月二十日、入隊のため、前のとおりの大府堺市金岡にある輜重連隊に集結し、十月二十八日、右同所を出発、下関行き列車に乗車す。十月二十九日早朝に下関駅に到着後は、関釜連絡船の接岸を待ち、乗船し、釜山港に向かう。同日、夕刻に釜山港に入港。下船上陸して、港近くの公会堂のような建物のある所で満州国林口行きの列車到着を待つて、程なく午後七時ごろ、いよいよ乗車。

やがて乗車後どれくらいの時間が過ぎたろうか、京城からかなりの距離を走って、急な坂があるらしく一時停車し、機関車を増結して急な坂を登り、満州国との国境線である鴨緑江を渡ったのを覚えている。たし

か満州国牡丹江省林口に着いたのは十一月二日の早朝のことであった。

その後は、係官の指示に従い、満州第二八七部隊東隊（教育隊とも呼ばれていた）に入った。昭和十九年十一月三日、この日は、私たちの部隊における入隊式が施行された。今日一日は楽しく過ごせるかもしれない。しかし、明日からのことはわからない。実際には、日常の教育訓練の銃剣術、馬術、馬の飼育、軍人勅諭及び典範令の暗誦等々、その他、私の一番苦手な射撃訓練もあった。

特に照準検査は、なんとしても私にはできることはなかった。班長が、お前はどこを見ているのだと言ったので、私は、標的が見えませんかと言えたら、「よし、お前は、そのままだよ」と、一言であった。見えないって、情けないことだと呟いた。このような調子で教育隊での月日は流れていった。どこの部隊でもあることだとは聞いていたが、訓練以外の夜の内務班で行なわれた「対抗ビンタ」、「竹刀」や「営内靴」での嵐が吹き荒れることがあった。「辛抱」「辛抱」の毎

日であったが、耐えに耐えて過ごした。

昭和二十年三月から五月の間に満州国内の各部隊共に大移動が始まったようでした。私の聞いた噂だけでも、日本本土防衛のため部隊の大半は内地に還送され、残った我々は残留部隊と呼ばれた。このころの私は、教育隊を出て、本隊に合流することになり、続いて本隊から平陽の部隊へ昭和二十年五月末ごろ転属を命ぜられ、騎兵隊の残留者と共同して残務整理を担当しました。

同年六月に入り、また小移動することになり、平陽部隊から満州第二六四部隊鶏寧貨物廠に転属しました。それからまだ日を経ない六月二十日ころになって、又もや鶏寧から八面通支廠高橋隊に配属され、私は隊の満州人労務者（クーリー）を従えて馬車で各地区への物資の輸送専門の軍務を遂行していたのであるが、当時、私の思ったことは、昭和十九年十一月三日教育隊入隊式以来、昭和三十年六月末日ごろまで八カ月間に部隊から部隊へ転々として慌ただしい日々を過ごして来たものだと、我ながら、自分自身、感心もし、時

の流れの早さと、環境の変化に左右されている今の私を反省するのです。

時は流れて、同年八月八日、夜八時ごろであった。我々、八面通上空をソ連軍偵察機と確かに思われる機種のものが飛来して、探索行為らしいことをやっているのを見受けた。

翌日の九日は防空壕掘りであった。ソ連軍侵攻も知らずに。

八月十日、私たちの部隊は急遽八面通を放棄して牡丹江に下る。時すでに八面通憲兵隊は焼失していた。何としたことか、すべて急を要するらしい。

八月十二日、牡丹江に。

八月十三日、牡丹江橋の爆破作戦の要請があったが、我々は、この作戦には参加せずに、そのまま横道河子に向かう。時折ソ連機からの銃撃を受けたが、我々は幸いにも被害はなかった。それから山々を巡って一路横道河子へ下った。そんな時にソ連軍が見えた。すかさず山の中に逃げ入って、野積みの陰に隠れて見えたときに、一人の兵士が何気なく道路を歩いていたよ

うに思えたが、ソ連軍の銃撃が頭に直撃、即死の状態であった。時を過ごしてその兵士の様子を確かめに行くと、私のその時の記憶では山梨県出身の方であったように思う。手の施しようもなく、合掌して別れました。昭和二十年八月同日、十四日に、やっと横道河子に到着できた。

今はもう食物も手元にはない状態になってきている。何んとかならないかと思う。山の中に入り、大豆や高粱などの野積みを壊し休み場所を造った。その作業に専念しているときに、山の中腹に白い布が翻っていた。皆それを望見して何だろうと思っていたら、だけれかが大声で「日本敗けたぞ」と叫んでいた。みんなは一緒に大きく溜息をついていた。

八月九日未明のソ連軍の侵攻の噂は、何となくのうちに自然に察知され、想像もついていたことであるとはいうものの、前日の八月八日夜のソ連軍の偵察機の飛来探索の行動のあった時から知っているはずの軍当局が、何故に八月九日未明の満州国全周地域における一斉侵攻に至ったことを知らせてくれなかったのだろ

うか。勿論、私などは末端の一兵士にすぎない者ではありましたが、うろろうと逃げ惑うばかりの毎日であったことについて文句のもっていきどころがなかった。

結局、私たち全員高橋少尉以下十五名は横道河子において慌ただしく武装解除された。

武装解除後の私たちに対するソ連兵について少し書いてみるが、それは間もなく彼らの掠奪行為が始まったということである。まずは、鶏寧貨物廠八面通支廠長高橋少尉の腕時計がソ連兵に奪われた。すぐその後で、別のソ連兵で、すこぶる愉快でお茶目な動作で種々と笑わせ我々と打ち解けようとする態度であったので、その兵士に高橋隊長が時計を奪われた事を話すと急にその場から立ち去り、それから少し時を経て、一兵士が我々のいる所に来て時計を示し、「これだろうか」と聞くのであった。

隊長は、受け取り、確かめ、「これだ」と態度で頷き示した。彼は「どうぞ」というような動作をして去って行った。私はそのとき、彼らも悪い奴ばかりではないなと思いました。

実は私も銃を胸に押し付けられながら、「ナイフ」を出せと言って私の大切に持っていた「ジャックナイフ」を引ったくるようにして持って行ってしまった。その彼は土民風の兵士であった。この事について、その後、人から聞いたのですが、「日本人の昔からの言い伝えにある武士の切腹」「腹切り」は、絶対にさせてはならないとソ連側の全将兵に厳命として通達されていたらしいと言う。考えて見れば、切れ物を取り上げようとしたのも右に書いたような事情があるとすればあるいは、さも有りなんと頷けることだと思いました。

昭和二十年八月二十一日ころだったろうか、私たちは横道河子^{ヨコミチカハ}を後にして拉古^{ラクゴ}病馬廠に向かう。その日、夕刻に到着した。ここで当分の間、過ごすらしい。住まうとなれば食べる物の心配をしなければならぬ。ここでは、まだソ連軍の指揮下にあるとは思えないほど静かであったので、とにかく、食料の確保が第一である。

空腹の毎日である。そこで、最も手近にある、ある

ものに気付いたのです。「拉古」に来て私たちは都合のよい人を見つけたのです。辻本さんという方で、牛馬の殺しの達人。幸いここは病馬廠です。何頭かの馬がいる。かわいそうであるが、一頭落として頂戴させてもらうことになったのです。味付けの塩も砂糖も醤油も勿論ない。全くの水炊きです。よく言うが「空腹に不味いものなし」であった。やっと飢えを凌ぐことができた。

拉古病馬廠で十日余り過ごして九月五日の午前十時ころであったと思う。全員集合して拉古を出発。そのときから本格的にソ連軍の指揮下に入り綏芬河^{スエフヘ}に向かうということであった。拉古出発時の人数は、私たちのように限られたグループは少人数であったが、さて集まってみると相当なもので、七百名以上はいて途中で更に増えたように思う。

昼は晴天でも夜は雨という早変わり天候、満州の秋の深まりは早く、長途の行軍になるであろう綏芬河への道である。何故に私たちはソ連国の方へ向かうのだろうか、その疑問はどうしても晴れない、成るように

なれ、今はもうソ連軍の言うに任せるよりない。手前勝手な解釈をすれば、綏芬河に出て、極東鉄道で南下して、日本海から日本に帰そうとしているのであろう。そんな甘い夢を見ながら歩いた。

綏芬河に着くまでの好天は何日あるだろうか、そんなことを考えている時に、秋の雨を誘い込んだのか、凄じ豪雨に見舞われた。疲れてぐっすり眠っている所へ急に襲い来る豪雨である。眼が覚めると、もう体半分水の中、飯盒その他の物が浮いて流れているような状態でした。一夜明けた、その翌日はカンカン照りで濡れた服・編上靴が「ヤケ」に重く、体もだるくてたまらない気持ちである。少しずつ分配してもらった粟であるが、炊いて食べようにも、燃えそうな枯れ草も濡れていて火にならないために、空腹のままでもまた歩くことになる。到着時間が夕方遅くなったことが度々あって、周囲が暗くて見えない。特に私のような目に障害のある者にとっては、そんなこんなで、なかなかそううまくはいかないのです。

もう私たち兵団は、相当の距離を日数を掛けてきた。

もう目的地と伝えられていた綏芬河は近いようだ。二日前から足の皮がはがれて靴が履けない。素足で歩き続けてようやく綏芬河に辿り着いた。ここで極東鉄道に乗り継ぐらしい。まだかなりの距離の満州領を走ってソ連領に入るはずである。勿論、当時の私には現地の地図は知る由もなかった。

昭和二十年九月十五日綏芬河で二日ほど休息の後、十七日、乗車。十八日ソ連領に入る。全行く先は不明である。シベリア極東鉄道に乗り入れた時からだと思ふ。車両は時々駅もない所でも停車したり、また走り出したりで時間などはさっぱり頼ることができず分からなかった。もう極東鉄道に入っているのであれば、南の方向に走らねばならないのに、北東に向かっていくように思えてならない。方向感覚も鈍くなっているのだろうか。

ある日の早朝、列車はまた途中で停車した。それからしばらくして銃声が聞こえた。不吉な予感が走った。すると私たちの車両から二両後方で事件が起きたのです。本当に、思えば哀れと言うか、ばかげた事と言います。

捨てなければならぬのか、停車した車両の外に出て、人間の生理現象の用便を果そうとしたのをソ連兵が脱走と思い違いして発砲したらしく、日本兵は腹部の貫通で即死であった。ほんのちょっとした双方の「思慮の不足」のために起きた悲しい出来事で、もう少し互いに慎重な行動であつて欲しかったと私は痛感しました。あまり時間がなかったが、ソ連側に頼んで、明け切らぬ薄暗い線路脇に遺体を埋めて、合掌して別れて来ました。本当に、かようにして瞬間の出来事のために他国の土の下に埋められて行く余裕の無い人生が憎らしく悲しく思えました。

そして間もなく列車が動き出したが、我々の行き先は、どこであるのか、全く分からない。そして、またホームのない駅に着いた。ソ連兵の歩哨というか、看守の声が聞こえて「ダワイ」「ダワイ」と手招きしている。「こっち」へ来いという意味であろうと判じて分かった。後で知ったが、この駅の名は「リスナヤー」駅で、午前十時の到着であつた。

駅を離れて少し奥まった所から右の山の入口へ歩い

て、緩い斜面の林の中で休んでいると、今夜はここで野宿すること。駅で下車したのは同僚三十人ほどである。日が落ちると少し薄ら寒い気がした。枯枝を集めて燃やして、もらっていた粟をお粥に炊いてすする。シートを敷いて朝まで体を横たえた。空には九月二十日ころであろうと思う、秋の星が煌めいていた。静かに思う来し方の在りし日の事。知らぬ間に眠りについたらしい。

翌日、八時半ころ集合して、それから約五キロほど入った所が、ずっと以前に囚人がいたという小屋で、瞬間、これが私たちの住居であり、城となるのかと思ひ、幻滅を感じた。その小屋の周囲でしばらく皆、ごろ寝で一休み、目が覚めると夜中に汽笛を鳴らして軽便車が入ってきた。「薪を積み込め」と言っているのです。点々と放置してある薪を早速に積み込んでやると、又も汽笛を鳴らして山を下っていった。「積み込み仕事」を早く終わらせてまた眠ることにした。

ここへ来ての最初の仕事は薪の積み込みであつたが、そのうちに伐採用の道具などがどっさり運ばれてきて、

まずは小屋作りから始まった。また、小屋造りの材料を採るために伐採も始めた。私は鍛冶屋の手伝いをすることになった。その人は元下士官らしく、たしか「赤根さん」と呼ばれていた。「マンドリン」のような格好をした鞆で風を送り刃物を作るときの向こう鉋になる者が、もう一人相手が必要であるというので私が選ばれたのですが、何でも親切丁寧に教えてくれたのですが、仕事が力が必要とする作業である。つきまとう空腹感と力不足は、常に十分に支給されない故の食糧の「量と質」に起因するものであることは、だれしも毎日求めている第一のソ連側への要求であった。

このように空腹と疲れの「二重苦」の上に、小屋で寝るときは昼夜の別なく南京虫の要塞に入ったと同様に襲われ、また、その上「シラミ」の攻撃である。それだけでもここは「地獄の三重苦」の世界であるといつて過言でない。人間社会の生活があるはずなのに、私たちをを悩ますこと、悩ます生物が余りにも多すぎるではないか。どうしてかのような忍従の生活を送らなければならぬのか。腹立たしい。この辺から栄養失調

で倒れる者や病気で亡くなる者が次第に出始めていた。昭和二十一年五月ころであった。私たちは移動して「チグロワヤ」収容所に入った。ここでは作業大隊として二大隊ほどの人員がいたようである。第一大隊は広大な山の中での伐採作業であり、その材料による宿舎の新築など各種の仕事に拡大されていた。また、別の第二大隊は駅の方で貨車の積み込み作業専門で、時折、第一大隊の方から応援に行ったりしていた。ここでは、皆一人一人の一日の「ノルマ」が決められていて、伐採の相手次第で能率の程度の上下が生じるので、相手が弱いと仕事が捗らず泣きたくなくなるような時もありました。

作業の最中、倒れてきた木の下敷きとなり股が裂けて二時間後に死亡した者、落ちて来た枝で頭を叩かれ即死した者、裂けた木が腹に落ちて来て腹部を打たれて十六時間後に息絶えた者、事故の連続で、小高い丘に立てられて行く墓標は今日もまた一つ、一つ、と増えていった。事故ばかりではない。空腹に耐えられぬ栄養失調死亡者も加わってである。この私もその一人

になるような事が起きたのです。

そのころの、ある日の起床後、少し腹が痛み出したので、そのことを班長に伝えて休ませてもらうことにした。ところが急にまた激しい痛みに襲われて直ぐに便所に行った。そこで多量の出血である。自分でもこれはえらいことだと思ひ医務室で診療を受けますと、直ぐに入室しなさいと言われたのです（ここには内科・外科・婦人科の三医師がいたようです）。腸出血ということであつた。ここでは化学薬品が少ないため、漢方薬的な「生薬」を使い、私の場合、専ら「金水引」という物ばかりであつた。下痢はなかなか止まらず、五日間過ぎても歩くことさえできず、雪の上を這つて便所に行き、帰つて来て部屋に入り床上がろうとして、も、なかなか力が出なくて上がれなかつた。次第に瘦せていく我が身、この時ほど心細く、日本に帰りたい、国に帰りたいと思つたことはなかつた。

本当に、いま家に着いたらすぐに死んでもよい、こんな所で死ぬものかと思つたのが、真実の気持ちであつたと申せます。それから四カ月間、出血は止まつたが、

体力は衰え、体重も三十数キロまで減つて、これで本当に耐えられるかなと、自分自身を信じられなかつたが、地獄の底から生き永らえて耐えてくれました。

十月ころまで静養して、ラーゲルの外でソ連軍の薬品倉庫の管理と薬品凍結防止の暖房係を始め、昭和二十二年の五月でその仕事を終えラーゲルに復帰し、七月末ころまで雑役ばかりに従事し、お陰で助けられて体力の恢復ができたようです。

昭和二十二年八月、馬の取扱い経験者で木材運搬の運送希望者はいないかというので、これに参加希望して四十人ほどで「バコスナヤ」へ移動した。そこでの作業は、長さ四メートルから六メートルの長物木材を三本又は四本に結束して馬に挽かせて七キロ乃至八キロの行程を運搬することであつた。途中で傾斜度六十くらいの急坂を駆け下りてゆく「スリル」は楽しいくらいであつたが、まかり間違えば命を落とすかもしれない坂道であつたので程々にしたが、下り切つた所は浅い川でかなりの水しぶきが上がつて爽快でもあつた。いま一つ楽しく思えたのは、この作業の合間に私の

得意の木登りで「松の実」を採ることであった。ソ連

の松は「五葉の松」で木が高く六メートル以上のものが多い。それに、でっかい松の実があるのは、外徑三十センチ近くで太さ十センチ以上の大物で、「実」はとても美味しくて、ソ連人も大好物である。よく煙草と交換してあげ、互いに喜び合ったものであった。喜びの少ない生活で嬉しいひと時であったともいえます。

昭和二十二年十一月中旬過ぎまで「パコスナヤ」にいた私たちは「チグロワヤ収容所」大隊に戻ることになった。このことを互いに良い方に解釈して喜んだ。

それは「ダモイ」近しでないだろうかと思った。

昭和二十二年十一月二十日ころであったと思う。私たちがこの収容所に復帰して「案の定」予想した通りに、日本内地への帰還者名の発表があり、確かに私の名前を呼ばれた時の嬉しさは、もう何物にも例えようのないほどの嬉しさであったが、入ソ以来二年余りの年月の間に、この異国の地に埋められて「無念さ」と「望郷の念」に涙を流しているであろう友、友、友よ、安かれと祈る。この還らざる兵士たち。皮肉にも「私

は生きている」のだ。

昭和二十二年十一月二十二日「チグロワヤ収容所」出発、約二千名、「チグロワヤ駅」発「ナホトカ」行き乗車、二十四日ナホトカ着、第一分所に入る。二十五日第二分所、二十六日は第三分所に移り乗船待ちとなる。この日、人員点呼、氏名照合をソ連軍将校によって行われた。

ナホトカに到着後は、第一分所に入るや直ちに民主グループ等による共産主義思想の宣伝、啓蒙教育があったことは勿論で、このとき、流れた噂では、やはり反動者は、またまた奥地に送り帰されるらしいということであったので、一応私たちは真面目な顔で拝聴しました。

同二十六日夕刻、遠州丸に乗船、約二千名、間もなく出航、日本海は静かでした。

昭和二十二年十一月二十九日朝、舞鶴港に入り、検疫終了後、上陸す。昭和十九年九月二十九日早朝下関港出航以来の日本本土への上陸でありました。衣服の消毒や宿舎に入っでの入国手続を終了す。

二十二年十二月一日、舞鶴市を出て、帰途に着き、和歌山県新宮市に向かう。十二月三日、本籍地の自宅に午後四時ごろ帰宅した。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十三年二月十一日生

現住所 新宮市神倉二丁目一―二十一

入隊前の状況及び職業 一時期郵便局配達員 主として山仕事に従事す

学歴 和歌山県東牟婁郡九重村尋常高等小学校高等科

二年を卒業

昭和十九年十月二十日、入隊のための集合場所大阪府

堺市金岡輜重連隊へ約一週間駐留

昭和十九年十一月二日、満州国牡丹江省林口県林口

満州第二八七部隊東隊(教育隊)

入隊後の移動、所属部隊

①昭和二十年五月末 平陽輜重隊と騎兵隊と混成

残務整理隊に転属

②昭和二十年六月初旬 平陽部隊から満州第二六

四四部隊鶏寧貨物廠に転属

③昭和二十年六月二十日 鶏寧から右同部隊八面

通支廠高橋隊に転属

昭和二十年八月五日 満州第二六四四部隊貨物廠八面

通支廠高橋隊、横道河子の山中にて武装解除

当時の階級 陸軍輜重一等兵

ソ連軍の指揮下に入った場所 牡丹江省拉古より綏芬

河へ向かう時の初期

入ソ経路 牡丹江省綏芬河經由極東シベリア鉄道に入

る(昭和二十年九月十八日)

入ソ後の収容所移動経過状況

昭和二十年九月二十日「リスナヤ」三十名

昭和二十一年五月「チグロワヤ」二千名

昭和二十二年八月「パコスナヤ」四十名

昭和二十二年十一月二十日「チグロワヤ」復帰

復員

乗船場所 ナホトカ港、昭和二十二年十一月二十

六日夕

上陸場所 舞鶴、十一月二十九日朝

故郷へ帰宅日 昭和二十二年十二月三日午後四時ころ
帰宅場所 本籍地奈良県吉野郡十津川村大字神下三七
三番地

復員後の生活

①職 業 昭和二十三年、和歌山県日高郡美浜町

大和紡績に入社

昭和二十四年五月、視力障害で退社、元の山林業に復帰

②休 業 昭和三十三年、山仕事中の事故のため背柱捻挫、恥骨々折

③入 学、卒業 昭和三十四年奈良県立盲字校に入學、昭和三十六年三月卒業、「あんま、マッサージ」修業免許取得

④開 業 昭和三十六年五月 三重県南牟婁郡紀和町板屋

⑤転 居 昭和四十二年、現住地である神宮市神倉二丁目一―二十一に移住、現在に至る

⑥健康状況 昭和四十九年九月より五十九年六月まで腎ネフローゼ、闘病生活十年、昭和六

十一年より快方に向かい、現状維持するも、最近腿鞘炎の症状、激痛に苦しんでおられる。

(和歌山県 橋本 義治)

抑 留 記

鳥取県 井上 万吉男

平壤三合里に集結

昭和二十年八月末日、教育隊の倉庫から被服、糧秣等が配給になり、一人用天幕を急造してリュックサックとし、詰め込めるだけ詰めて背負い、三合里に向けて出発した。我が家への土産にもなるだろうと思うと、重いのも苦労はなかった。夕闇迫るころ辛うじて三合里に到着した。入口にはソ連兵が大きな声で騒いでいる。なんのことかと思いついて見ればリュックサックの点検である。折角担いだ荷物をほとんど没収され、苦労の第一歩が始まった。